

はばたけ 千羽鶴



豊田清史

ちくま少年図書館 65
社会の本



はばたけ 千羽鶴

豊田清史

ちくま少年図書館 65

社会の本



著者略歴

1921年広島に生まれる。現広島大学教育学部卒業。広島県教育委員会文化課，教育研究所主事，中学校教頭等を歴任。

また「広島文学」編集同人事務局長，短歌と評論誌「火幻」を編集，今日に至る。

著書に歌集「火の幻」「炎の証」「心眼」ほか，「炎は消えず」「千羽鶴」「原爆文献誌」「広島県短歌史」等がある。

「原爆の子」の像の建立にあたっては「平和をきずく児童・生徒の会」の世話人をつとめた。

筑摩書房／1982年初版
243pp./18.8cm/四六判



1982年7月30日 第1刷発行

著者 豊田清史

発行者 布川角左衛門

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京 (291) 7651 (営業)

(294) 6711 (編集)

郵便番号101-91/振替東京6-4123

© K. Toyoda, Printed in Japan

厚徳社印刷・和田製本

(分類) 8012 (製品) 04065 (出版社) 4604

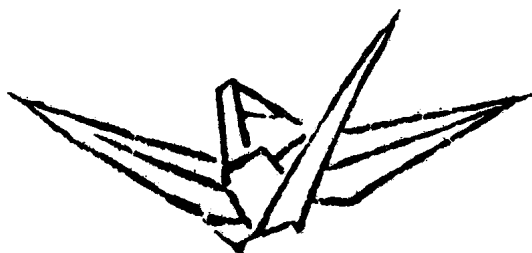
乱丁，落丁本の場合は御面倒ですが，小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

はばたけ
千羽鶴



はばたけ 千羽鶴・もくじ

- 1 「原爆の子」の像の前で
けんばく
 - 2 リレーの選手だった禎子
せんば ずる さだこ
 - 3 千羽鶴を折る
 - 4 祈りはむなしく
いの
 - 5 罪もないのに、なぜ……
つみ
 - 6 起ち上がった子どもたち
た
 - 7 へこけしの会からへ平和をきずく会へ
 - 8 全国の友だちからの尊い基金
 - 9 またも友だちが死んでいく
 - 10 私たちは実行する
 - 11 級友が作った文集「こけし」
- 五
二〇
二九
三六
四四
五二
六〇
六八
七六
八四
九二
一〇〇
一〇八
一一六



- | | | | | | | | | |
|-----------|--------------|-----------|--------|------------|------------|-----------|--------|----------|
| 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 |
| 今もはばたく千羽鶴 | 平和への火、〈折鶴の会〉 | 「星空のあなたに」 | 像ができた！ | 像ができるまでは…… | 星の一つが見つめてる | 世界の人々に訴える | 制作者決まる | 批判を乗りこえて |
| 二六 | 二五 | 一九七 | 一九 | 一七〇 | 一六四 | 一五〇 | 一三九 | 二六 |

〈広島平和をきづく児童・生徒の会〉のあしあと
あとがき
三七

Ⅰ 「原爆の子」の像の前で



広島平和記念公園の中央に近く、折鶴おりづるで有名な「原爆の子」の像が建っている。見上げる三脚形さんぎょうがたのコンクリートの上には、両手を広げて高く鶴つるをかざした少女のブロンズ像が、じつとかなたを見すえている。

今日きょうは一九八一年九月二十二日。あたりには楠くすや桜さくらなどがすっかり繁しげり、花壇かだんにはかわいらしい白や紅べにのニチニチソウが咲さきそろっている。今日も朝から、小学校、中学校それに、高校の修学旅行の団体やおとなの観光客が、ここを訪れる。いまでも九州からきて観光バスからはき出された中学生二〇〇名が、バスガイドのお姉さんに導かれて像のそばにやってくる。

「みなさん。これが千羽鶴せんぱづるで有名な『原爆の子』の像でございます。昭和三十年（一九五五

年)十月、原爆症で死んでいった佐々木禎子さんを弔って、広島市内のお友だちが建てたものです。高さ一〇メートル、頂上に鶴をかざしている少女は禎子さんを型どったものです。禎子さんはなんとか生きようと、原爆病院で折鶴を六四四羽まで折ったのですが、ついにあの恐ろしい原爆症のために、わずか十二歳の幼い生命を、この世から消していったのでございます——」

「ごらんください。この塔の下にまばゆくつるされている千羽鶴は、全国の多くの人々から寄せられ、また広島に修学旅行にやってくる子どもさんたちは、みんな忘れず、こうして千羽鶴を折ってきて供えるので、このように名所となっているのです」

私は気づかれないように団体の後ろに立ち、じっとガイドの説明に耳をかたむける。聞いているうちに、説明のふしぶしに事実とちがったことばがあるのを聞きのがせない思いがつきあげてくる。

たとえば像の高さ、ブロンズ像の少女について、原爆病院でということ、また六四四羽折ったという鶴の数も、みんな事実とはちがった説明となっている。

これはなにも「原爆の子」の像についてだけのことでない。原爆による被災や原爆症などについても、閃光から三十数年たった今日、ゆがめられたり、美化されて語られているものが多い。

この「原爆の子」の像は昭和三十三年（一九五八年）五月に建立されたもので、あれからもう二四年もたってしまった。こうした年月のへだたりによって、いろいろなまちがいが生じるのもやむをえない気もするが、やはり、事実こそ何よりも平和を支える力であり、事実を書きとめておくことこそ大切だと思うのである。本書を読んで、パスガイドの説明にある、事実とちがった部分も、一つ一つ事実を知って納得してもらえと思う。

私がこの像の前にたたずみながら思うことは、この世に生まれてきても、自分のせいではない原爆のために、わずか十二歳で死んでいかなければならなかったこの少女のこと、そして今もつづく核実験のことである。

原爆はふつうの兵器とちがって、この街の人々も、木草、建物も、全てを焼きつくしたといえる。そして現在では原水爆は当時の一〇〇〇倍という威力をもってきている。私どもが今日、いわゆる核をよけて通れない時代に生きていることを思わないではいられない。佐々木禎子という中学一年生の少女の原爆症による死はどのようであったか、また、この生徒は生きようとしてどのように鶴を折ったか、そして級友たちによる「原爆の子」の建立運動はどのように展開され、その実現をみたか、これらのことを直接そばにいて見つけた私は、そのありのままの事実を書いておきたいと思う。

自分のことをつけ加えるのは気がひけるが、「原爆の子」の像を建てた子どもたちと私

との関係を一応説明しておきたい。

昭和二十年（一九四五年）八月六日、広島に原爆が投下されたとき、私は現広島大学付属の国民学校（小学校）の教官をしていて、広島駅東側の路上で閃光を浴びた。一時は生死の間をさまよい、勤めもできなくなって療養をつづけた。その結果やっとよくなって、疲れやすい体をいたわりながら広島市立幟町中学校に勤務していたとき、ちょうどこの学校に在籍していた佐々木楨子が原爆症で死んでいった。そして像の建立運動が起ると、学校長や関係者のつよい要請もあり、私自身被爆者として戦後原爆について詩歌集も出版し、文学運動などにたずさわっていたので、像建立の母体となった広島市内小学校・中学校・高校が結成した〈平和をきずく児童・生徒の会〉の世話人となったわけである。

ところで私には、この実践記をまとめるにあたって、はじめに一つだけ書いておきたいことがある。

それは、「原爆の子」の像の建立運動は、よい詩を書くこととおなじいとなみではなかったか、ということである。

「原爆の子」の像をつくった子どもたちのいとなみは、ものをしっかりと見つめることにより、独自の生きた像を描き上げることだった。しかも、広島市の平和記念公園にある三十にあまるモニュメント（記念碑）の中でも、心と形ともに美しい作品像として現に人々の賞

賛をあつめてゐる。

私は「原爆の子」の像をつくり上げた子どもたちのたくましい実行力を思い、それはそのまま一編のすぐれた詩作品をつくるいとなみと同じだったと思うのである。

折鶴のメッカである平和記念公園内のこの像が建立された当時は、アメリカをはじめ、ソ連やイギリスなどの各国が、競って水爆実験を始め、それに対する恐ろしさが報道されていた。この像の場合も、そうした全国の友だちや人々の支援が厚かったので、みごとに建立が成ったともいえよう。私の知るところでは、戦後子どもたちが主体的に、団体として平和運動を行った例はごく少なく、「ピオニール」というソビエトの少年団と、広島このへ平和をきずく児童・生徒の会、およびのちのへ折鶴の会、くらしいの思う。

美しくはばたく「原爆の子」の像の千羽鶴のかげに、広島や長崎の町では原爆症で人知れず亡くなつていく人々がいまも後を絶たない。

2 リレーの選手だった禎子^{さだこ}



佐々木禎子は、母が三十歳のとき長女として生まれ、文集「こけし」（後述二一六ページ）の母親の手記によれば、爆心地から北方約二キロメートルへだたった市内三篠町の自宅で、一瞬の閃光を浴びた（一九八一年八月五日付「読売新聞」には、隣接する楠木町で、とある）。しかし、当時二歳だったこの子は、幸い、身にやけどひとつ受けなかった。

父の繁夫氏は兵隊にかり出されて中国山脈の霧の町、三次の中学校の仮兵舎に起居し、留守の家では祖母と母、それに兄の雅弘と乳のみの子の禎子の四人が食卓についていた。その日も朝からやけつくような広島暑さ。——突然、不気味な光とともにドーンと突風が家をおそった。と、赤ん坊の禎子はふっ飛ばされて、たたきつけられるように小さな米びつの上にならんと座らされていた。はっとした母親のふじ子さんは、のけぞりながらも、

わが子のそばに走りよって、しかと禎子を抱きかかえた。

「ああ、よかった！」

と思うもつかの間、戸外を見るとどの家もいちめん火煙を吹いて燃えさかりだした。母はすばやく禎子を背負い、幼い雅弘の手を引き、祖母をうながしながら戸外にかけ出した。

母も祖母もなにも持たず、逃げまどう町の人々について火をくぐり、やっと三〇〇メートルほど先の三篠橋の下にかけこんだ。ところが祖母はどうしたとか、急に何かうわごとをいいつづけながら、逃げてきた道をまたわが家のほうへひき返して行つた。何か大切な忘れものが氣になったのだろうか。子ども二人を連れた母は呼びかけつつも、それをどうすることもできなかった。あとになってわかつてみると、せっかく戸外に逃げて出た祖母は、わが家の前で焼死していた。

あたりの火の海をのがれて親子三人は、傷ついて血を流しながら逃げてくる人々を見て、三篠橋の下に五時間も立ちすくんでいた。水、水——と叫んでそこにかけてきて、いきなり川面に頭をつっこむ兵隊たち、焼け落ちた建物がそのまま燃えつづけながら水面を流れてきて、目の前に迫ってくる。まったく、川が燃えていた。川をへだてて噴きあげる真つ黒な煙と炎を見つめながら、人々とともにこの親子も、どこへ逃げたらよいのか途方にくれるばかりだった。夕暮れちかくまでそこにくぎづけになって、ただ呆然と焼け焦

げる街を見つめるだけだった。みると、長男の雅弘は頭に負傷して血がにじんでいたが、禎子はかすり傷ひとつ負っていなかった。

「ああ、この子らは助かった！」

母はわが子らを抱きしめた。三人は朝食もじゅうぶんとっていなかったし、空腹だった。母はこれまでやめさせていた乳を出して禎子の口にふくませた。

顔の焼けた男の人がすぐ目の前につつこんできて、川の水をガブガブと飲んだ。モンペや服を焼かれた街の男女が、ぼろぎれのようになって橋の下にころげこんでくる。上空は火煙でますますあやしく曇っていく。

（ああ、夫がここにいてくれたら！）二人のわが子を守って、母のふじ子さんは切実に夫を恋いつづけた。

——それから九年の歳月が過ぎていき、一家は理髪店を営むようになっていた。敗戦で、禎子の父もその夏無事に生きて帰り、一家四人が一つ家に暮らすことができた。昭和二十一年（一九四六年）八月には妹の美津江、二十三年には弟の英二が生まれ、家をどうにか市内の中心鉄砲町にこしらえて理髪店を開くに至った。しかし、廃墟のなかでの一家六人の生活は、だいいちに買い出しに出かけねば食べてゆけず、店もバラックのささやかなしつ

▼ 6年リレー選手の禎子さん（前列中央）



らえ方で、稼いでも稼いでも前の借金からなかなかぬけることができない暮らしだった。

やがて人並み以上の体格に育った禎子は、昭和二十四年（一九四九年）^{のぼろまち} 幟町小学校に入学した。

この小学校は市街の中心にあつて、児童数は、一九〇〇名の多さだった。教室から校庭をへだてた南側には、すぐ隣接して広島中央放送局の焼けただれた建物があつて、その屋上にとりつけられたJOFKのネオンの枠が昼は死んだようにそびえ、さらにその向こうには、焼けた福屋百貨店や中国新聞社のビルがくっきりと見える。

六年生の四月（昭和二十九年）、受持ちの先生が変わった。六年生は六つのクラスにわかれていた。禎子のクラスは竹組で、ほとんどが商店や勤め人の家庭の子であつた。幟町小学校の通学区には、家

を原爆で焼かれた被災者や貧しい引揚者などが多く、バラックのにわか造りの市営住宅から通学している子たちも多かった。子どもたちの行儀もあまりほめたものではなく、先生に反抗する、平気で買い食いをする、マール（ケンダマ）をもっておとながやる賭博のまねをする、といったふうだった。竹組もこうしたことでは負けてはいない、腕白の集まったクラスであった。授業時間中でも、どうかすると蜂の巣をつついたように騒然となり、五年生のときの先生は手をやいて、このクラスの担任をやめてしまったほどだった。

新しく郡部の村から赴任してきた野村先生は、背がすらっとして柔和な面もちのなかにも、なにか威厳がそなわっていた。お年はまだ二十五歳くらいかな、と、禎子のクラスの子どもたちは見てとった。

最初は男子のなかには、先生のいなかなまりをまねて、その目を盗んではおどける子もいた。まっげの濃い、文具店の子地後尚彦や、安井敏雄たちは、クラスでもおどけの立役者だった。

「おい、ちよこ八、こんどの先生はやさしいようで怖いやつじゃのう」

「なーに、高田の山猿じゃ、いなかもんよう」

「ほいでも、じろっと見たとき、怖いでえ」

「あほう」